

高校の合同博物館見学会を活用した歴史教育の実践

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 金沢大学古代文明・文化資源学研究所 公開日: 2025-04-23 キーワード: 作成者: 多々良 穰 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24517/0002002503

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 4.0 International License.



高校の合同博物館見学会を活用した歴史教育の実践 Historical Education of making good use of joint High School Museum Tours

多々良 穰
(東北学院榴ヶ岡高等学校)

はじめに

学習指導要領により、博物館を積極的に活用して授業を工夫するように呼びかけられて久しい。筆者の勤務校では、2006年から博物館見学会を継続して実施してきた。そして2017年からは他校にも呼びかけて合同で博物館見学会を行ってきた。しかし2020年にコロナウィルスが流行したため、博物館見学会を4年間中止した。そしてようやく、2024年に再開するに至った。本稿では2024年度の夏期休業中に実施した博物館見学会の活動内容と状況を報告し、博物館見学会の成果と今後の留意すべきことを、考古学の立場と学習デザインの観点から考察する。

以前筆者は、高校の歴史教育における博物館の利用目的として、①歴史を通して高校生に思考力や表現力をつけること、②単なる暗記学習から脱却し、「問い」を用意して歴史学習が深い学びとなるようにすること、③生の細かい情報を得ること、④博物館の役割と職員の働き方を理解すること、を述べた(多々良2020: 21-22)。本稿では、上記の①～③に焦点を当て、博物館見学会の意義についても考えたい。

1. 問題の所在

実際に博物館で資料を見学することは、生の資料を通して歴史を学習する有効な機会である。それに加えて、今回の博物館見学会では、最近の学習方法として教育現場で意識されている「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体化を目指して(奈須2021、奈須・伏木2023など)、充実した歴史学習になるように試みた。

学習指導要領によると、授業の中で「個別最適な学び」の成果を「協働的な学び」に生かし、更にその成果を「個別最適な学び」に還元するなど「個別最適な学び」と「協働的な学び」を一体的に充実すべきである。さらにICTの活用により、子供一人一人が自分のペースを大事にしながら共同で作成・編集等を行う活動や、多様な意見を共有しつつ合意形成を図る活動など、「協働的な学び」も発展させることができる(文部科学省2021: 19)。

しかし、「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体化は、必ずしもICTを活用した学習活動においてのみ成立するとは限らない、と筆者は考えている。そして、その両方の学びをうまく組み合わせた学習が実現されるよう、博物館見学会を実施した。すなわち「資料の見学」

表1 これまでの博物館見学会一覧

回	年度	展覧会名	場所	参加人数	備考
1	2006	大アンコールワット展	仙台市博物館	5	
2	2007	吉村作治の早大エジプト発掘40年展	仙台市博物館	16	
3	2008	ナスカ地上絵の謎展	斎藤報恩会自然史博物館	32	特別行事
4	2009	古代カルタゴとローマ展	仙台市博物館	20	事前解説開始
5		トリノ・エジプト展	宮城県美術館	26	保護者に拡大
6	2010	黄金の都シカン展	仙台市博物館	23	
7	2011	ポンペイ展	仙台市博物館	中止	東日本大震災
8	2012	インカ帝国展	仙台市博物館	80	
9	2013	慶長遣欧使節展	仙台市博物館	27	
10	2015	キリスト教の源流と東方伝播展	東北学院大学博物館	30	事前講演
11	2016	黄金のファラオと大ピラミッド展	仙台市博物館	33	
12	2017	世界遺産ラスコー展	東北歴史博物館	20	
13	2018	古代アンデス文明展	仙台市博物館	86	他校合同
14	2019	蝦夷展	東北歴史博物館	20	他校合同
15	2024	大航海時代へ展	仙台市博物館	32	他校合同

が「個別最適な学び」を推進し、「事前学習」におけるペアワークが「協働的な学び」を推進することになるのである。

以下、博物館見学会での具体的活動を見ていこう。

2. 事前の企画・準備

「個別最適な学び」と「協働的な学び」をセットで行い、筆者の勤務校だけではなく他の高校にも博物館を活用した学習機会を広げるため、2018年から複数の高校による合同見学会を実施してきた(表1)。初めて他校とともに合同見学会を実施した古代アンデス文明展は、筆者の専門である中南米考古学が対象であったため、比較的他校の教員に声をかけやすかった。だが、2020年に実施した蝦夷展は、ほぼ筆者の勤務校の生徒による見学会となった(註1)。

そこで今回は筆者が個人的に他校に声掛けするのではなく、宮城県高等学校社会科教育研究会の運営委員会の承諾を得て、同部会長と共同研修委員長である筆者の連名で文書を作成し募集した。募集期間は6月下旬から約3週間とし、各高校の地歴公民科の教員に取りまとめを依頼して、仙台市内の七つの高校が参加することになった。

表2 博物館見学会に向けた準備

2024年2月	・仙台市博物館に対して見学会実施可否の打診
2024年3月	・見学会実施を宮城県高等学校社会科教育研究会の第2回運営委員会に打診 ・2024年度の対象となる特別展の選定
2024年4月	・見学会実施を同第3回運営委員会で決定
2024年5月	・見学会実施を2024年度同総会で承認
2024年6月	・見学会の案内を各校に送付・掲示
2024年7月	・見学会の参加人数の確定 ・仙台市博物館に観覧料・入館料減免申請 ・見学会要項の配付(各校を通じて参加者へ) ・ミュージアムセミナーに参加して下見し、仙台市博物館職員と最終打合せ

さて、企画・準備に際しては、事前に仙台市博物館の職員から2024年度に開催予定の特別展の情報を得た。2024年2月に連絡を取った際、特別展「大航海時代—マルコ・ポーロが開いた世界—」が7～8月に行われる予定であることを知り、高校の授業で予習することが可能だったため、この特別展を対象にした。歴史総合では「前近代の世界」で、世界史探究では「イラン諸国家の興亡とイラン文明」、「東アジア世界の展開とモンゴル帝国」や「大交易・大交流の時代」でそれぞれ扱うことができるからである。博物館見学会を一つの点とするのではなく、通常授業と結びつけて一本の線とする視点は、2018年に開催した「古代アンデス文明展」の見学会でも重視していた(多々良2020)。細かい準備の行程は、表2を参照されたい。

3. 「大航海時代」に関連する授業

博物館見学会前に行った通常授業は、「大航海時代」の特別展の内容とリンクするよう心掛け、意図的に関連事項を解説したり生徒自身が考えたりするようにデザインした。筆者の勤務校では、1年次の歴史総合と2年次の世界史探究の授業が、今回の博物館見学会に関係していた。以下に記す授業内での問いは、「大航海時代」に関連したもののみを抽出した。(1)～(3)はペアワーク中心の授業、(4)はグループワーク中心の授業で、ともに「個別最適な学び」と「協働的な学び」の双方を意識した。(4)は2コマ(合計100分)を要し、教員側からの解説はほぼしなかった。なお、ここで紹介する授業内容は、あくまでも筆者が勤務校で実施したもので、合同博物館見学会に参加したすべての高校で行われたものではないことを断っておく。

(1) 1年歴史総合

前近代の世界(ヨーロッパの海外進出)

○テーマ

・大航海時代による世界の変化を考える

○問い

- ・なぜ世界的な交易が始まったの?
- ・15～16世紀にはどのような商品が取引されたの?

(2) 2年世界史探究

イラン諸国家の興亡とイラン文明

○テーマ

・イランにおける諸国家の政策や文化を知る

○問い

- ・パルティアが栄えた要因とは？
- ・三つの水瓶（図1）や獅子狩図案（図2）からわかることは？



図1 ①ササン朝 ②唐 ③日本（法隆寺）



図2 ササン朝の獅子狩銀皿（左）
法隆寺の獅子狩文錦（右）

(3) 2年世界史探究

東西交流とモンゴル帝国の解体

○テーマ

- ・モンゴル帝国の交流がもたらしたものを理解する

○問い

- ・資料（ジャムチ）はどのような制度についての記述？
- ・泉州の資料からどのようなことが読み取れるの？

(4) 2年世界史探究

欧州の進出と米大陸の変容（2時間分の授業）

○テーマ

- ・担当部分を整理して自分たちで授業をする

○方法

- ・教科書を精読する

・疑問点を抜き出す

・それをもとに問いを作成する（テーマを設定する）

・重要点を掘り出しスライドを作成する

・グループごとにプレゼンし全体で共有する

○分担するジャンル

・ヨーロッパの海外進出

・ヨーロッパのアジア参入

・ヨーロッパのアメリカ発見と征服

・世界の一体化と大西洋世界の形成

○ゴール

・今日の授業で友達に伝えたいことは？

→ ゴールシート（字数無制限の作文）の提出

以上の四つの授業のうち、スライドを投影して解説を加えた資料は以下のものである（註2）。

授業(1) ・世界地図

・『東方見聞録（世界の記述）』

授業(2) ・パルティアンショット（図4）

・三つの水瓶

・カットグラス

・獅子狩文の銀皿と獅子狩文錦

授業(3) ・ジャムチの資料とパイザ（図3）

・泉州の資料



図3 パイザ（通行証）

他校における授業内容について、引率者に一つ一つ確認したわけではないが、後述するアンケート結果からも事前に行われた高校の授業の内容を思い出した生徒たちも散見された。筆者の勤務校の生徒たちも、見学会後に「授業でやりましたよね」と確認してくる姿が目立ち、大航海時代に関連する授業を事前にやった成果を実感した。

なお、本稿は授業デザインを論じることが目的ではないため、以上の四つの授業についての詳しい説明と分析は、別の機会に譲りたい。

4. 2024年度合同博物館見学会「大航海時代へ」

2024年8月1日に、特別展「大航海時代へ—マルコ・ポーロが開いた世界—」を対象にした高等学校合同博物館見学会を、仙台市博物館で開催した。コロナ禍のため2020年度から休止していたので、4年ぶりの実施であった。しかも、仙台市博物館はリニューアルのため令和2021年10月1日から閉館しており、2024年4月2日から再開した事情も重なり、タイムリーな企画となった。前述したように、今回はより広く高校生に参加を呼び掛けるため、歴史部会から宮城県下のすべての高校に案内を出し、引率教員を8名、高校生18名、小中学生3名、一般3名の合計32名が参加した。以下に概要を記しておく。

(1) 時程

- 9:00～ 9:15 開場、入室、準備（資料配付）
- 9:15～ 9:30 見学会の趣旨説明・ワークシート（以後WSと記す）による学習
多々良 穰（共同研修委員長）
- 9:30～10:05 事前解説
黒田風花氏（仙台市博物館学芸員）
- 10:10～12:30 自由に個人見学
アンケートとWSの回収

(2) 目的

学習指導要領の内容の取扱いには、歴史総合・日本史探究・世界史探究ともに「博物館などを調査・見学したりするなど、具体的に学ぶよう指導を工夫すること」とある（文部科学省 2018a: 61 など）。しかし、通常の授業にその学習を取り入れることは現実的に困難である。そこで専門家からの事前解説を受け、「問いを表現すること」を生徒が意識するようにし、実際に生の史資料を見学して深く学習しやすいようにWSを作成した（付録1）。

(3) 事前解説

今回の見学会のテーマは「大航海時代がどのように開かれたのかを考える」とした。事前解説に先立って筆者が二つ質問をして参加者が「問いの表現」を行った（註3）。隣や前後に座っているペアと自分の解答を説明し合い、他者との違いを共有した。「協働学習」を実践し、参

加者が考え方の多様性を実感することが、このペアワークの狙いだった。なお、さまざまな観点から疑問を持つクリティカルシンキング（批判的思考力）の姿勢を培うためにも、「問い」を設定することが必要である（多々良 2020: 11-12）。そうした観点から、以前の博物館見学会で配付したWSから空欄補充を一切なくし、見学者自身の考えを引き出すような問いに変更した（付録1）。参加者が取り組んだ問いと主な解答は、以下の通りである。



写真1 ペアワークの様子

Q1: 「大航海時代」でイメージすることは?

香辛料を直接入手するために、スペインやポルトガルが新たな航路を開拓したことは、どの世界史探究の教科書にも載っており、参加者はこのことを想起したと考えられる。また、新航路に関わるコロンブス、マゼラン、ヴァスコ＝ダ＝ガマといった人物が上位に認められる（表3）。

表3 Q1の解答例
(解答数17、複数解答可、上位10位)

解答	人数
香辛料	11
コロンブス	8
マゼラン	8
バスコ＝ダ＝ガマ	6
遠洋航路（の開拓）	4
インド	4
大きな帆船	3
奴隷（三角貿易）	3
「アメリカ」の発見	3
地図	3

Q2：『東方見聞録』で知っていることは？

事前の知識がどのくらいあるかを確認する質問であり、日本が黄金の国だと記されていたという解答が最も多かった。この本と関係の深いマルコ＝ポーロという解答は筆者の予想より少なく、逆に彼が本を書いている事実を知っている参加者が3名もいたこと、無回答が4名もいたことは意外だった（表4）。

表4 Q2の解答例
(解答数17、複数解答可)

解答	人数
黄金の国ジバング	7
マルコ＝ポーロ	4
マルコ＝ポーロが書いた本ではない	3
広大な範囲の商業ネットワーク	1
交易都市泉州の発展	1
フビライ＝ハン	1
ヨーロッパ	1
シルクロード	1
免税対策	1
銀	1
無回答	4

二つの問いの解答をペアで共有した後、筆者から簡単な「大航海時代」についてのミニ解説をした。その後学芸員の黒田風花氏が、展示品の見どころをスライドを用いて事前解説した。概要は以下の通りである。

モンゴル帝国と大航海時代は、イタリア人のマルコ＝ポーロ（1254～1324）がシルクロードを旅して残した『東方見聞録』によって繋がった。彼が投獄中に口述筆記させた『東方見聞録』は、のちに多くの写本として作成され、大航海時代を切り開く冒険心の原動力となった。人・物・文化の交流が世界規模で始まり、イランの水瓶、獅子狩文、唐代の唐三彩などの遺物が東西に伝播した。また、騎兵が追手に対して後ろ向きに矢を射るパルティアンショット（図4）など、イラン独特の戦法もあった。



図4 パルティアンショット

配付された特別展のチラシには、次のような説明が掲載されていた。

ヴェネツィアの商人である父とともにシルクロードを渡ったとされるマルコ＝ポーロは、ヨーロッパに東洋の物語を伝えました。それは『東方見聞録』という一冊の書物の形をとり、多くの冒険者たちがこの本を手がかりに大海原を渡り、大航海時代を切り開きました。この展覧会では、大航海時代へと歴史が動く大きなうねりと世界の広がり、天理大学附属天理参考館・天理図書館の所蔵資料から解き明かしていきます。

事前解説では、当時の地図や地球儀も紹介され、それらを手がかりに広い世界に進出していった当時の人々の冒険心を、参加者は想像することができただろう。また、授業で扱った資料がいくつか出てきたため、非常に関心を持って解説を聴いていた様子がアンケート結果からもうかがえ、見学への期待感を高める効果があったと言えよう。



写真2 事前解説を聴く参加者たち

事前解説を聴いた後で、新たに生じた疑問を問いにするよう参加者に呼びかけた。ここで立てた問いは解答のみを求めるのではなく、「問いの表現」を試みること自体に意味がある。どのような疑問を持ったのかをそれぞれが共有し、自分と異なる見方を学び合うようにする狙いがある。そして、疑問を持ったことを見学によって解決するよう働きかけ、参加者の探究へのモチベーションを高めるよう試みた。以下、WSに記されたすべての解答例を記しておく。

Q3：今日の見学会で知りたいことは？

大きな問いの一つ作ってみよう！

- ・ヨーロッパ人の考え方はどう変わったのか？（2人）
- ・たくさんの方が航海した理由は？（2人）
- ・日本に対する印象や情報はどう変化したか？（2人）
- ・世界の一体化が与えた影響とは？（2人）
- ・どんなものが日本に伝わり発展したのか？（2人）
- ・新航路により交易品はどのように変わったのか？
- ・大航海時代が日本に与えた影響とは？
- ・マルコ＝ポーロは旅で何を知り、感じたのか？
- ・どんなものが日本から世界に伝わったのか？
- ・なぜ香辛料を求めて航海したのか？
- ・デザインや技術はどのように似ているのか？
- ・航海時に服はどのようにしていたのか？

(4) 特別展の見学

見学を終えたら WS とアンケートを提出するようにお願いし、自由見学の時間に入った。個人・グループ問わず、好きな展示品を好きなように見学し、実際に資料を目の前にして学習していた。早い者で1時間、もっとも時間をかけた者で2時間半を超えるなど、思い思いに見学した。この学習活動が「個別最適な学び」とそれに付随する「自由進度学習」ということになる。

5. WS の記述やアンケート結果

回収した WS とアンケート結果を、高校生と引率者に分けて整理した。

(1) 高校生の回答から

○事前解説

学芸員の黒田氏に、展示品の見どころを説明していただいた。18人から回収したアンケートでは、とても役に立ったが17人、役に立ったが1人と全員が高評価を下しており、効果的だったことを示している。よかった点として、歴史的背景が理解できた、スライドにより興味がわいた、細かい解説が役に立った、大航海時代と仙台のかかわりが理解できた、などの感想が寄せられた。

やはり、見学会には事前解説は欠かすことのできない学習機会であることがわかる。このことは、以前報告した拙稿でも同様の結果であった（多々良 2020）。

○ワークシートを用いたペアワーク

アンケートでは、とても役に立ったが16人、まずまず役に立ったが2人とやはり高評価であった。前述したように、事前解説によって生まれた新たな疑問点を言語化し、それをペアで共有して複数の視点を学び合って「問いを表現する」学習が効果的だったことを示している。

○今日の見学会のゴール

最後に「今日の見学会で学んだこと」を自由に書いてもらった。得た知識や思考の振り返りを意味する。紙面の関係で主なものを紹介するにとどめるが、大きく、①具体的な資料への関心が書かれたもの、②個別最適で深い学びが実践されたもの、③歴史と現代の結びつきに言及したもの、④見学会と授業とのつながりに触れているもの、の四つに分けられる。

①具体的な資料への関心

古代の武器は大ぶりなので、隠して持ち運ぶことは難しいと考えられる。装飾品としても美しいので、実際は武器というよりも見せる、あるいは飾る用途があったかもしれない。鏡は背面が美しく、細かな凹凸で絵柄を表現している。三彩狩猟文鳳首瓶にはパルティアンショットが描かれており、事前解説で説明されたイランの戦法が確認でき、武力がイランの繁栄をもたらした要因の一つだと思った。ヘレフォード図は海の割合が少なく、ほぼ陸地が描かれていて、神々や化け物がいた。プロトレマイオスの地理学でも、海を越えると人間ではない生き物が描かれていて、口から風のようなものを吹いており、当時の思想が表現されている。（高1）

10世紀以上前でも金属工や美術が盛んで、青銅の鏡やカットガラスの装飾が綺麗だった。また、地中海沿岸では、オリーブオイルなどの液状のものが多くあったためか、水差しが作られていて、その土地に合った製品が昔からあったことが分かった。イスラーム商人との交易によりルネサンスが登場し、器などの絵に神話モチーフが多く見られるようになった。『東方見聞録』が脚色まじりの内容なのに、なぜ信頼して海に出た人が多かったのか疑問だったが、冒険心がかきたてられて航海に出たのが納得できた。（高1）

②個別最適で深い学び

地図や海図のどの部分が不完全なのかが説明されており、興味深く見学した。それらを含めた本の記述により、影響を受けた者たちのことも書かれており（北極周辺の気候、東西の距離を誤解させるようなもの）、当時の人々の生活や出来事について深く知ることができたと同時に身近に感じられた。天文や宇宙に興味があるため、今回の目当ては天球儀や暦だったが、最も美しいと感じたのは瀬戸内海西海航路図屏風だった。海を表現する深い青と（色あせたのか元々なのかわからないが）岸に近づくにつれて緑がかっていく水と、金色に光る雲が綺麗だった。所在不明とされてきたようだが、天理図書館に所蔵されたこの作品だと判明し、今日私の目の前に現れてくれたことを嬉しく思う（高3）。

今まで大航海時代をどう見るかについて、自分が持っていた視点は「ヨーロッパ諸国から見た到達した国」もしくは「到達した国から見たヨーロッパ諸国」のどちらかだったが、今回の見学で新しく「それぞれの国同士」という視点が加わった。特にパトラとインドネシアの織物についての解説文から、そうした新たな視点を得るだけでなく、その他の資料にはどんなものがあるのか、文化面だけでなく他の要素についてはどうなのか気になった。また、当時の日本はヨーロッパから得た非ヨーロッパ的な知識にどのような関心を抱いたのかも気になった。そして、展示品には公式の記録が多く、大衆的な視点からの感想というものはなかったと感じたので、これらの疑問を夏休み中に調べてみようと思った。（高2）

③歴史と現代の結びつき

シルクロードを通してアジア・日本に伝えられた高度な技術を使った工芸品に驚いた。形や模様が均一につくられているし、色彩や焼きの技術も優れていた。日本から海外に向けて漆の工芸品も輸出されていて、現代の製品にも通じているものもあったと思った。伊達輝宗が使ったとされる「東雲」はものすごくかっこよかった。今の仙台市のマークにとっても似ている装飾があったので、関係があるのか疑問に感じた。（高2）

④見学会と授業とのつながり

今まで中学校や高校で勉強してきたことが、今日の展示を見たことで結びついた気がした。大航海時代はどち

らかというと中国やインドなどが中心のアジアと、ヨーロッパや西アジアが主となっているのだと思っていたが、日本もかなり関わっていたことがわかって驚いた。初めはヨーロッパから存在を認識すらされていなかったのに、時代が進むにつれて存在や場所がはっきりし、航海の目標にもなっていたそうで興味がわいたし、今後の日本史探究の授業が楽しみになった（高2）。

(2) 引率者の回答から

引率者には、次の二つの質問に回答してもらった。回答があった4人のコメントを紹介する。

質問事項

1. 教師自身が学んだこと
2. 生徒にプラスになったこと、見学会の意義

○引率者A

1. 私自身二度目の見学だったが、事前解説を聴いた後の見学でより詳しく学ぶことができた。また、展示品の中にも「これは特に貴重なものだ」というものを事前に知ることによって、非常に感動しながら学ぶことができた。
2. 高校生に入館料を出すことは難しい家庭もあるので、無料で見学できるのが一番の意義だと思った。また、図表やスマートフォンなどで様々な資料を見てはいるものの、実際にそれを見ることで関心と意欲を引き出すことができた。

他校と合同で行うことも大きな意義であった。部活では他校と交流することがあってもそれ以外で交流することは少ないので、一緒に勉強する機会があるのは貴重だと思った。ただ、見学前もしくは見学後に他校との交流を含めたグループ学習があれば、見学会がより充実したものになると思われる。

○引率者B

1. 世界の動きや資料（文化財）に関する知識が不足していたので、純粋に現物資料から当時の様々なつながりについて知ることができた点が良かった。「大航海時代」という大きなテーマのもとで、様々な関連資料が展示されており、個人的には「慶長遣欧使節関係資料」の実物を見ることができたのが一番嬉しかった。

このように、博物館見学は大きなテーマがありながらも、個人個人の興味・関心で切り口を設定して考え、探究の第一歩になり得ることを改めて学んだ。

2. ガラス越しではあるが、現物に触れる体験を通して、興味・関心に基づいて知識や思考を深めていくきっかけを与えることができる点に意義がある。授業で写真や映像、複製物などを見せることはできるが、本物に触れる貴重な機会は博物館に足を運ばなければならない。高校生が個人で博物館に行くことのハードルを下げる意味でも、見学会を実施することは意味のあることだと感じた。

参加者が少なかったのは残念なことで、多くの高校から参加してもらえるような働き掛けをどのようにしたらよいか、個人的に考えていた。高校生になると、クラスでの授業が中心となり、小中学生のように「体験」することがどうしても少なくなってしまう。総合探究同様に、自分の興味・関心を切り口に考え、体験する機会をつくること、地歴科で学んだこととリアルな「社会」をつなぐ場としての博物館を活かすことが、見学会を行う意義だと感じた。

○引率者C

1. 南蛮屏風画から、多くの黒人が描かれていることを確認できた。また、パンフレットに載っていた資料を実際に確認できたことは、とても有意義な時間となった。事前解説で設定された「問いの表現」を大切にすることは、日々の授業のやり方も含めて大変興味深く勉強になった。「質問づくり (QFT)」を今後の自分の授業に活かしたいと思う (註4)。
2. 参加者は、大航海時代の一端がよく理解できたと思う。事前解説がないと、多分わからないままだったことも多くあったと思う。ただ、「協働的な学び」を深めるためには、参加者同士でテーマを設定して討議などできたらもっと面白かったのではないかな。いずれにせよ、大変興味深い機会となったことは明白であり、ぜひ来年以降も継続すべきだと考えている。

○引率者D

1. 『東方見聞録』の系譜の解説と、数多くの『東方見聞録』の展示が大変面白かった。2024年9月の歴史部会例会で小川幸司氏の講演があるので、『世界史との

対話』の中にあつた新約聖書等の記述より、イエスの歴史像に迫るという一節を思い出しながら見学していた (註5)。また、私は焼き物や工芸品好きなので、最初の焼き物や刀剣などの展示を楽しめた。西夏文字は綺麗で、魅了される気持ちも分かる気がした。

2. 事前の学習会がかなり有益であったと、参加者から話された。自分たち教員側では予備知識として持っている事象を、事前に効果的に提示することによって、参加者の見学に大きな影響が及ぼされるのだということを確認した。「問いの作成」に関しては私も授業展開で苦勞しているが、見学に際して事前に問いを作成する形式のWSが良かった。「本物」に触れる機会として、このような展示会は参加者にとってまたとない刺激を与える場所になっていた。今回の見学会でも、参加者が地球儀などを食い入るように見ているのが印象的だった。

上記の質問事項のほか、展示への提言もあったので、貴重な意見として記しておきたい。どのように展示したら歴史像をしっかりと捉えられるかを考えながら見学するという姿勢は、引率者も一学習者として学ぶことができ、見学会の重要性が認められる。

13世紀のモンゴルの平和の時代と16世紀の「大航海時代」の捉え方は、今日の高校世界史のレベルでもそれまでの世界史像の捉え方とは大きく異なっている分野であると思われる。今回の展示についても、マルコ=ポーロが「大航海時代」を切り開いたという歴史観を前提とするものではなく、モンゴルの時代の東西交流 (あるいは諸地域との交易) と16・17世紀のヨーロッパとアジアとの東西交流 (イエズス会の活動など) を対照させ、それぞれのキーパーソンとしてマルコ=ポーロと遣欧使節を示すという展示方法も可能であったかもしれない。分かりやすさをはじめとする様々な事情が当然あるのだろうが、少なくとも17世紀はじめあたりまではヨーロッパによるアジア支配という側面が強調され過ぎない方が良いのではないだろうか。

6. 博物館見学会の意義

博物館見学会の意義を、考古学の立場と学習デザインの観点から考察していこう。

本稿の最初に、見学会の目的として、①歴史を通して高校生に思考力や表現力をつけること、②単なる暗記学習から脱却し、「問い」を用意して歴史学習が深い学びとなるようにすること、③生の細かい情報を得ること、を書いた。考古資料に関して言えば、①と③が見学会で実現できたことであろう。

考古資料を「綺麗だ」とか「貴重だ」という感想を持つのはある意味当然かもしれない。しかし、そこに資料を解釈する思考が働くと、歴史学習としての深みが増す。高校生の回答を例にとれば、「古代の武器は大ぶりなので、実際は武器というよりも見せる、あるいは飾る用途があったかもしれない」や「三彩狩猟文鳳首瓶にはパルティアンショットが描かれており、武力がイランの繁栄をもたらした要因の一つだと思った」などは、見学者が資料をもとに当時の生活について解釈を加えたことが明らかである。この高校生は見学にかなりの時間をかけており、生の資料を観察してじっくり思考し、その資料がどのように使用されたのか、図像を残した意味は何だったのかに思いを巡らせた様子がうかがえる。授業のやり方にもよるが、スライドを投影して短く解説して終わったり、資料集の写真を各自見ておくように指示したりするだけでは、ここまで思考力を働かせることは時間的に難しい。ここに考古資料を生で見学する意義がある。

また、資料見学は一斉解説とは異なり、自分のペースで自由に見学することができる。よって教室内で一斉授業ではなかなか実践することが難しい「自由進度学習」だと言える。最近注目されている「学びのユニバーサルデザイン（註6）」は、教師の視点ではなく子どもの視点から学習をデザインする概念である（増田 2022）。教室での授業では、空間的にも時間的にも個人で自由に学習できないバリアがあるが、それがなくなれば生徒たちは主体的に学ぶことができる。つまり、今回の見学会は「学びのユニバーサルデザイン」そのものだと言うこともできる。この学びのデザインは「個別最適な学び」と共通する要素があり、参加したすべての生徒たちが学ぶ可能性を引き出すことができる。高校生の回答には「瀬戸内海西海航路図屏風は所在不明とされてきたようだが、天理図書館に所蔵されたこの作品だと判明し、今日私の目の前に現れてくれたことを嬉しく思う」とあり、参加者が長年気にかかっていたこの作品を発見した時の感動を綴っている。また「新たな視点を得るだけでなく、その他の資料にはどんなものがあるのか、文化面だけでなく

他の要素についてはどうなのか気になった。展示品には公式の記録が多く、大衆的な視点からの感想というものではなかったと感じたので、これらの疑問を夏休み中に調べてみようと思った」という回答から、個人的に見学会後も継続して学習したいという熱意が伝わってくる。こうした意欲を引き出すのは、やはり生で資料を見学する機会だったと言える。

次に、学習デザインの観点から、「事前解説」の際に配付したWSが見学会の目的に効果的だったことを述べる。見学会の目的として挙げた、①歴史を通して高校生に思考力や表現力をつけること、②単なる暗記学習から脱却し、「問い」を用意して歴史学習が深い学びとなるようにすること、が筆者の準備したWSによって実践されたと考えられる。前述した「大航海時代でイメージすることは？」や『『東方見聞録』で知っていることは？』だけでなく、見学中もしくは見学後にWSにまとめる次の問いを用意した（付録1）。

- Q4：シルクロードが日本にもたらしたもの（こと）は何だと思いますか？
- Q5：マルコ＝ポーロは、東方でどんなことに驚いてルスティケッロに話したと思いますか？
- Q6：いわゆる「大航海時代」によって、ヨーロッパ以外の地域にはどのような影響があったと考えますか？

Q4の回答には、「ガラス碗」「唐三彩」「水瓶」などの器物や焼き物が多く書かれている。見学後に口頭で参加者と会話したときに、「授業で話された」「教科書や資料集に載っていた」「事前解説のスライドに出てきたときに思い出した」などの回答が数人から寄せられた。引率者Aのコメントにもあるように、「図表やスマートフォンなどで様々な資料を見てはいるものの、実際にそれを見ることで関心と意欲を引き出す」意図が筆者にはあり、それがうまく参加者に作用したと言える。

Q5の回答には、チーターによる獲物狩りやジャムチのパイザ（通行証）という異国の風習のほか、アジアにはヨーロッパと同じような人間がいたという答えが多かった。ヨーロッパの東方には化け物がいたという噂があったことを事前解説で話していたことが、参加者の回答に反映されていた。マルコ＝ポーロはもちろんのこと、当時の人々が冒険心をもって広い世界を訪れ、新たな発見

に心を躍らせたことを想像できたと思われる。

Q6の回答には、「元々の自分たちの文化に新たなヨーロッパからの文化が加わって独自の文化が形成されたかもしれない」や、「キリスト教が伝わることで新たな考え方が生まれた」など、新たな文化について考察するものが見られた。また、「古代アメリカのように独自の文化が壊された」というマイナス面を指摘する者もいた。

以上のように、この問いを考えることで、思考力がつくことはもちろん、実際の資料見学を通して自分の考えを言語化することで、表現力も身につくのである。そして、「今日の見学会のゴール」にある振り返り「今日の見学会で学習したことは何ですか？」によって、思考力だけでなく文章表現力を伸ばすことができる。特に、見学会で学びが終了するのではなく、③歴史と現代の結びつきに言及したものや、④見学会と授業とのつながりに触れているものがあつたことは、前述した通りである。

また、事前解説でペアワークをする際に、自分たちの考えを共有するだけでなく、見学後に「今日のゴール」を書く際に、見学した資料について自分の理解したことが正しいのか、自分の事実誤認がないのかなど、意見交換したり確認したりする様子が見受けられた。これは、引率者側がそのような学習を仕向けたわけではなく、自然に発生した「協働的な学び」である。つまり、単なる暗記学習から脱却し、歴史学習が深い学びとなるように試みたことが成功したことを示している。

以上のことから、今回の博物館見学会は、「個別最適な学び」と「協働的な学び」が一体化した歴史学習になり、「自由進度学習」にもつながったと言える。

7. 今後の博物館見学会のあり方

2018・2019年度の博物館見学会では「事前授業→博物館見学会→事後授業→振り返り（提出課題）」というサイクルをデザインし、通常授業と博物館見学会の連携を試みた（多々良 2020）。しかし、今回は複数の参加校による見学会だったため、歩調を合わせることができず、筆者の勤務校を除いて事後授業を実施しなかった。また、事前授業も参加の必須条件としなかったため、見学会前に「大航海時代」の授業をしたかどうかは各高校によって異なつた。次年度、可能であれば準備をしっかりと進め、参加校のコンセンサスを得て以前のサイクルを実践したい。

また、見学後に自由解散とした点について、改善する必要がある。端的に言えば、「協働的な学び」が不十分だった。前述したように、引率者からは次のような意見が出た。

「見学前もしくは見学後に他校との交流を含めたグループ学習があれば、見学会がより充実したものになると思われる。」

「協働的な学びを深めるためには、参加者同士でテーマを設定して討議などできたらもっと面白かつたのではないか。」

時間的制約が問題となるものの、見学してから再度参加者を集めてグループ学習や討議を行うか、別日を設けて再度「協働的な学び」の機会を設けるか、いずれかの方法が考えられる。ただ、後者は参加者が全員集まることは困難だと思われる。よって、「個別最適な学び」＝「自由進度学習」を保障するため、当日に再度集まってグループ学習の機会を設定し、その後要望に応じて見学を再開する方法を検討したい。そしてそのような学習活動を推進すれば、初顔合わせである複数の高校生たちが一堂に会して「協働的な学び」を実践することに繋がり、合同博物館見学会の意義をより高めることになる。

また、WSの内容についても改善の余地がある。事前解説で使用したWSには「今日の見学会で知りたいことは？」という質問があつた。疑問を出すという「問いの表現」は重要だが、その問いに対して自分なりの解答を出してペアとシェアするという学習をデザインすれば、さらに深い学びにつながつただろう。次年度のWSには、更なる工夫が必要だ。そして、そのWSを共有してそれぞれ対話を進めるように事後学習を設定すれば、さらなる「協働的な学び」に結びつくはずである。

おわりに

最近、主体的に学ぶ態度や思考力をつける学習のために、どのように学習デザインをしたらよいか、手法や資料の選定に教員のモチベーションがシフトしているように思われる。本稿でも、「学びのユニバーサルデザイン」について簡単に触れた。だが、教員が学習デザインをするうえで重要なのは、歴史に関心を抱かせ、それを基に生徒自身が勉強したくなるような機会を創ることである。その有効な機会となるのが博物館見学会であり、そのために複数の高校が合同で博物館を見学して歴史を学ぶよう企画したわけである。大きな役割を果たすのが、考古

資料であり「問い」であるのは、これまで述べてきた通りである。

本稿で扱った事例は、考古学の研究とはあまり関連がないように思われるかもしれない。しかし、事前授業や事前解説を含めた具体的な内容を周知することにより、考古学研究者にも高校生の博物館活用の実態を理解していただきたい。そして、大学進学後の考古学教育と指導を考えるきっかけにいただければ幸いである。

謝辞

2024年度宮城県高等学校合同博物館見学会にご協力いただき、貴重な学習機会を与えていただいた仙台市博物館の相原裕起子、黒田風花、永山達郎各氏に心から感謝申し上げます。また、見学会当日に引率していただいた勝亦浩之（泉館山）、軽部圭一郎（仙台第二）、斎藤竹彦（宮城県工業）、田上史也・藤崎統康（以上仙台育英学園）、千葉博幸（仙台第一）、吉澤光博（仙台二華）の諸先生方にも、心からお礼申し上げます。

註

- (1) 蝦夷展は、多賀城市にある東北歴史博物館で開催された。一方、2018年に古代アンデス文明展が開かれた仙台市博物館は、教育活動の一環として「入館料減免申請書」を提出すれば、仙台市内の高校生は入館無料となる。
- (2) 授業を行う時点では、博物館見学会における事前解説の具体的な内容が決定していなかったため、筆者の独自の授業デザインにおいてスライドやプリントを作成した。
- (3) 「問いの表現」とは、資料から生徒が情報を読み取ったりまとめたり、複数の資料を比較したり関連付けたりすることにより、興味・関心をもったこと、疑問に思ったこと、追究したいことなどを見いだす学習活動をさす（文部科学省 2018b: 278）。
- (4) QFT (Question Formulation Technique) は問いづくりの手法で、多様な視点から様々な疑問を問いにするものである。①テーマについて問いを立てる、②問いを「開いた問い」（はい、いいえで答えられず説明を要するもの）と「閉じた問い」（はい、いいえで答えられるもの）に分類する、③問いの形を転換する（「開いた問い」を「閉じた問い」に、「閉じた問い」を「開いた問い」に作り直す）、④問いに優先順位をつける、⑤問いを評価して振り返る、というプロセスが一般的である。
- (5) 2024年9月17日に、仙台第二高等学校にて宮城県高等学校社会科教育研究会歴史部会例会が開かれ、小川幸司氏（長

野県伊那弥生ヶ丘高等学校教諭）が「歴史総合」と「世界史探究」の深め方—理論と実践」と題する講演を行った。

ここで引率者 D が意識したのは、歴史学習で重要なのはいつ何が起こったかという「事件・事実」、その事件・事実からどのような歴史の論理がよみとれるかという「解釈」、そして歴史を素材にして人間や政治のあり方、ひいては自分の生き方についての「歴史批評」という、世界史の「知」の三層構造を見えるようにすることが歴史学習で重要である（小川 2011）ということだろう。

- (6) すべての学習者が主体的に学びを実現できるよう支援するため、アメリカの CAST (Center for Applied Special Technology) が提唱する概念フレームワークのことである。どんな生徒でも（特別支援教育に限定されずに）主体性をもって個別最適な学びができるようデザインする。この主な特徴は、画一的な指導ではなく、代替手段をあらかじめ授業の中で設定しておくことである。

参考文献

小川 幸司

2011 『世界史との対話 70 時間の歴史批評』上巻、地歴社

多々良 穰

2020 「博物館見学会を活用した考古学と歴史教育の連携」『金沢大学考古学紀要』41: 21-39、金沢大学考古学講座

文部科学省

2018a 『高等学校学習指導要領』（平成 30 年告示）

2018b 『高等学校学習指導要領解説 地理歴史編』（平成 30 年告示）

2021 『令和の日本型学校教育』の構築を目指して～全ての子どもたちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～（中教審答申）、中教審第 228 号

奈須 正裕

2021 『個別最適な学びと協働的な学び』東洋館出版社

奈須 正裕・伏木 久始（編）

2023 『「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実を目指して』北大路書房

増田 謙太郎

2022 『学びのユニバーサルデザインと個別最適な学び』明治図書

図版出典

- 図1 『世界史探究』（東京書籍）
2 東書 世探 701、p. 55
- 図2 『詳説世界史 世界史探究』（山川出版社）
81 山川 世探 704、p. 65
- 図3 『世界史探究』（東京書籍）
2 東書 世探 701、p. 156
- 図4 『詳説世界史 世界史探究』（山川出版社）
81 山川 世探 704、p. 107

付録1 見学会ワークシート

特別展「大航海時代へ」宮城県高等学校合同博物館見学会 ワークシート

●本日の見学会のテーマ「大航海時代がどのように開かれたのかを考える」

Q1:「大航海時代」でイメージすることは？（知らない場合は空欄で結構です。）

Q2:『東方見聞録（世界の記述）』で知っていることは？（知らない場合は空欄で結構です。）

●事前解説を聞いた後で考えてみましょう

Q3:大きな問いを一つだけつくってみよう！ 今日の見学会で知りたいことは？
はい／いいえ、で答えられる問い（クローズな問い）ではなく、説明が答えになるような問い（オープンな問い）を！

●見学しながら、あるいは見学後にまとめましょう

第1章 シルクロードの時代

Q4:シルクロードが日本にもたらしたものの（こと）は何だと思いますか？

第2章 マルコポーロと『東方見聞録』

Q5:マルコポーロは、東方でどんなことに驚いてルスティケッロに話したと思いますか？

第4章 接触と拡散

Q6:いわゆる「大航海時代」によって、ヨーロッパ以外の地域にはどのような影響があったと考えますか？

●今日の見学会のゴール

今日の見学会で学習したことは何ですか？ 自由に書いてください（今日得た知識・思考の振り返り）。

高等学校

年 組 番 氏名

※アンケートも含め、ありがとうございました。 アンケートは帰る前にご提出ください。
今日書く時間がなければ、このワークシートを、夏休み明けに学校の見学会担当の先生に提出願います。